

日米協会戦後70周年記念シンポジウム

日米民間文化交流70年

— これまでとこれから —

特別インタビュー

「私から見た日米文化交流」

ドナルド・キーンコロンビア大学名誉教授

聞き手 久野明子 日米協会副会長

特別インタビューでは、2012年3月に日本国籍を取得され、90歳を超えられた今でもお元気で日本文学の研究を続けられているドナルド・キーン氏に副会長の久野明子がお話を伺った。45分間という非常に限られた時間ではあったが、キーン先生は終始優しい微笑みを浮かべ、敗戦から70年、日本が歩んできた道のりが、先生と日本との絆を深める歳月だったことを、時折ユーモアをまじえながら数々のエピソードを語って下さった。

太平洋戦争中、通訳、翻訳官の任務中に尋問した日本人捕虜たちとの出会いが、先生の日本人感を決定的に変え、その後先生を日本研究者としての道を歩かせることになったというお話は、非常に衝撃的であり興味深いものであった。

戦後まもなく京都大学大学院に留学された先生は、「日本文学選集」の翻訳と編集に力を注ぎ、日本人以上に優れた美意識を持ったアメリカ人として、当時の著名な作家や知識人たちから尊敬され愛された。すでに他界された方たちが多いが、中でも谷崎潤一郎、三島由紀夫、司馬遼太郎諸氏とは仕事を越えた親交を持たれたという。

先生が国籍を取得されたことについて、先生は生まれながらに日本人と同じような美意識や感受性を持っておられるので、先生の中では自然なことではなかったのかという質問に対しては、まさにその通りと頷いておられた。ただ、先生ご自身の中でアメリカ人と日本人とのせめぎ合いは無いのかという質問には、基本的にはアメリカ人ですとの答えが返ってきた。

また、何故、日本語のお名前に「鬼怒鳴門」という漢字を選ばれたのかと伺うと、ご自分は鬼怒川温泉が大好きだったから、鬼怒川温泉の観光大使にでもなろうかしらとユーモアたっぷりに答えられた。

最後に、戦後70年で日本人が失ったもの得たものとは何うと、終戦直後と比べると日本人の生活も身体的にも格段に良くなってきているし、民主主義を享受できるようになったが、今の社会は以前より安全でなくなったし、日本人の暮らしにゆとりがなくなったのではとすどい指摘をされた。

(文責 久野明子)